緋弾のアリア the RED likes blood.

ジョーの一階

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本に来たばかりの銀髪外国人　澪は昔大好きだったお父さんの小さい時の夢である日本で『武偵』になるために東京武偵高を受ける。そこで知り合ったのは遠山金次という。

戦闘時　だ　け　は　頼りになる男だった。

ある男が研究を完成させたことによって、ある元々はか弱かった少女が遠山金次達に巻き込まれて行く。

衝動で書いてしまいました。続かないかもしれませんが、生暖かい目で見守って下さい。

何番煎じか分からないオリ主最強ものです。
無理な人はバックれて下さい。

目次

第1話　the examination　3／17　前編　1
第2話　the examination　3／17　後編　22
EX　side キンジ　39
第3話　good morning　3／19　47

第1話 the examination 3／17
前編

世の中には『運命』という言葉があるらしい。
もし、『運命』というものがが本当にあるとするならば
彼と会ったことは、『運命』なのだろうか。

＊＊＊＊

オリオン座のアンタレスが不気味に輝いていた寒い夜がお父さんに会った最後の夜。
森の中を散歩したんだ。大好きなお父さんと一緒に。
足の裏にまめができるくらいにたくさん歩いた。そして、二人で歩く夜はちょっぴり怖かった、自分の足音が本当に自分の足音なのか不安だった。とっても。

ザクッ、ザクッ、
前を歩くお父さんの足音は何処かぎこちないと思う。まるで何か隠しているみたい。
横を向いたらフクロウがいた。
可愛い。
標本にして飾りたいな♪
北斗七星が爛々とヒカリを放つ。
そんなことを思いながらお父さんの表情を視ていたら
突然、私をまっすぐ見てから、あまり話さないから良く見えない歯を見せた。何言うのかな?
「お前は・aからだ」
私の世界はその言葉を聞いた瞬間に凍てついた。
私には聞こえた。
お父さんが「お前は空だ。」っていったのを。
喪失感、
ナノかな、ドクンと心臓が跳ね上がった。心にも何か重たくて黒いものが入ったみたい。
そして私は押し寄せてくる沢山の黒い感情の囁きに流されるままに心を偽った。ホ

ントは分かっている筈なのに。
〝お父さんも私を欠陥品と思っているんだ。〟
沸沸と腹の底の方から殺意が沸いてきた。
だってそうでしょ？
今まで私をかばってくれていた人に目の前で、嫌いって言われたら。
誰だって悲しみが込み上げてくる筈でしょう？
だからかまだ十歳だった私はお父さんの裾をつかんで泣いていた。
侮辱の言葉を聞いたのに
それを見かねたのだろうか、お父さんは私の頭を撫でてくれた。そして私はそうして貰うのが好きだった。
歩き続けたから疲れたのか眠気が襲ってきた。頭がボンヤリする中お父さんは言った。
「愛する娘に最後のプレゼントをあげよ。私の研究の結晶だ。これは・・・」
ああ、私はやっぱりお父さんが好きなんだ。
お父さんに抱き上げられる浮遊感の中で私は意識を手放した。
そして、目を開けた私は

手術台の上にいた。

沙灘・E・澪　　4歳

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『武偵』

正式名称は武装探偵。

日々凶悪化していく犯罪を見かねた政府の弱腰な妥協案であり、新設された国家資格である。

この資格の特徴として、武装の許可、逮捕権の付与がある。つまり、警察と余り差異がない。

但し、武偵は金で動く。俗に言う「何でも屋」の側面も持つ。

そんな武偵にも”ランク”と言うものが存在する。
通常のランクは下から順にE，D，C，B，Aの五つである。
しかし、この五つだけでなくAの上には特別なランクであるSランクがある。
Aランクが数人束になってかかっても返り討ちに出来るほどの差がある。
だがSランクの上にもランクが存在するそれがRランク、R
”Royal”の頭文字のRだ、小国の軍隊を 1人で相手に出来る程の強さを持つ人たち。各国の首脳や王族の専属護衛に選ばれるからroyalらしい。

そんな武偵が紡ぐ物語。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
バチンという音と共に情報の奔流が押し寄せる。
そうして、情報の深海に身体無きままに沈んだ「私」は一寸先は闇の中でイメージする。
「私」という三角柱。
そこへと集まる骨格(記憶)や血液(感情)、贅肉(感情)
それらによって、精密に作られて行く私の身体。

その時、情報の濁流に一条のヒカリが差し込んできた。
私はその方向へ手を伸ばす。のばす。ノバ：

「ハァ、ハァ、グギッ、ハァ、ハァ、コクン」
意識が一気に覚醒する。そして、寝る前に近くに置いておいたペットボトルの水を飲んで、寝巻きの袖で額に点々としている汗を若干拭う。
体を起こし座った私はまだまだ暗い部屋を見渡しながら、窓を覆っているカーテンをめくると外は墨を塗ったくったかのように真っ暗だった。
『まだ日が昇ってないのかな?』
そう思った私は充電器につながっている携帯をロック画面を立ち上げるとそこに表示されている数字を確認する。
午前五時・・・・予定よりも三十分くらいは早いかな?
「さて、シャワーでも入りますか」
ベットから立ち上がった私は肩甲骨の下あたりまで伸ばした銀髪を手櫛で梳きながらバスルームへと歩く。

脱衣所に入り、寝汗を吸ったであろう寝間着を洗濯機に放り込んでスタートボタンを押す。

あぁ、もちろん下着はネットに入れてある。

洗濯機が回り始めたのを確認してシャワールームに入る。

コックを開き 水を出す。よーしこれで温水が・

「冷たっ！」

出てこなかった。そうだここのシャワーは、はじめ冷水が出て来るんだった・・・

もう目が覚めた、それはもうぱっっちりと。

電流の駆け巡り始めた頭がおそるおそる水温を確認させる。

「・・・ちょっとぬるいかな？ まぁ、いいけど・・・」

そう呟いてから置いてあるシャンプーの頭を押す。

自分の髪は切りたてだからなのか泡はすぐに髪全体に広がる。・・うーん気持ちいい。

痛めないように優しく洗った筈なのに前よりも早く洗い終わった。

シャンプーをシャワーで流したあと、身体を洗う。

母親譲りで色素の無い真っ白の肌は生気があんまり感じられず、そのきめ細やかな肌はまるで大理石や白磁のよう。

『アルビノ』

誰しも一度は聞いたことはあるだろう。
メラニン色素を作る機能が失われることによって起こる突然変異の個体を指す。普通、ならそうだ。遺伝する事は無い。
しかし、私の家系は「色素が作れない」という。構造的欠陥を持っている。だからドイツの山奥でひっそりと暮らしていた。日光に対する耐性がほとんど無いに等しいからね。ならどうして私は今ここにいるか、それは簡単、私は外に出る手段を獲得したから。お父さんのお陰で。
そのお父さんがよく、私の紅い双眸を「宝石みたいだ。」ってよく褒めてくれた。この眼も母親譲り。
ただ、色素が無いため必要以上に光が入ってくるので何の補助なしの無い私の視力は悪い。
だから私は眼がいい人にちょっとだけ、ほんのちょっとだけ憧れがある。ほんの少しだけ・・・
そうしている内に身体を洗い、リンスを終わらせた私は水道栓を閉めて、脱衣所で身体をタオルで拭く。髪にはドライヤーを当てる。
そして、乾いた髪の一部を編んで左のもみ上げ近くに小さな三つ編みを作る。残った髪は青いゴムでまとめてポニテにする。もちろんノーメイク。

こっちの用意はすぐできる。しかし問題は

「・・何着たらいいのかな」

私が待っていたのに制服は届かなかった。何かの手違いかもしれない。まぁ必要無いからいいんだけどね。

「動き易かったらそれでいいかな?」

結局のところいつもの私服ということに帰着した。そう決まった私は箪笥の引き出しからTシャツと短パン、黒のニーソを取り出して着る。

もちろん下着はすでに来ている。

左手首に腕時計を着けて、時間を確認。

6時ちょっと前

「えっと試験は9時半に集合の筈

あー、でも早く行って、防弾制服借りないとな、」

そうだとしても大分時間が余ったな。まぁ早く行って周りをぶらぶらするのもやぶさかでもないな、何て思いながら私は買い溜めしている栄養食品の中からウイダーとカロリーメイトを、冷蔵庫の中からはトマトとプリンを取り出して机の上に並べる。

朝食の時間也。

朝食の片手間に私の受ける東京武偵高の説明をしたいと思う。

東京武偵高校

レインボーブリッジ南方に浮かぶ南北2キロ・東西５００メートルの人工浮島有り、簡単に言えば武偵を養成する高校

確か校則で拳銃、刀剣の携帯が義務付けられていたはずだ。

そして学科は

強襲科（アサルト）
狙撃科（スナイプ）
諜報科（レザード）
尋問科（ダギュラ）
探偵科（インケスタ）
装備科（アムド）
車輌科（ロジ）
通信科（コネクト）
情報科（インフォルマ）
衛生科（メディカ）

救護科(アンビュラス)
超能力捜査研究科(SSRR)
特殊捜査研究科(CVRR)
の13学科ある。
この内、私は強襲科を受けるつもりだ。
そしてこの学科の入学試験はバトルロワイヤル。実際の戦闘のようなものだ。
そうだと私は知った。
そしてこの学科は生存率が97．1％、つまり入学式にいて卒業式に居ないのが何人かいるということだ。なのでこの学科は「明日なき学科」と揶揄されることもある。
そうしている内に食べ終わった私は歯を磨いて玄関へ行く。
「行ってきます。」
と私の声が無人の家に響く。
お気に入りのスケボーを私は抱えてアパートの二階から飛び降りる。
「よっと、」
とん、難なく着地した私はスケボーに乗って少し急ぎ目で試験会場に向かい始めた。
その初っ端、
ププーーーーーーーー

バスがこっちに向かってきた。
「ちぇっ」
舌打ちした私は地面に置いたばかりのスケボーを抱えて、前方宙返りをした。バスを飛び越えるくらいの。
「よっと、」
着地まで完璧。我ながら感心だ。少しヘッドホンが乱れた位だ。
周りを見渡して誰も見てない訳では無い事を確認した私はスケボーに乗ってもう一度走り出す。
私のいるアパートは武偵高のメガフロートと同じなのですぐに着くのだが今回は一度教務科(マスターズ)に寄るため少し時間がかかる。
それほど時間も掛からないが。
五分後
「すみません。入学試験に受けに来たので防弾制服貸して下さい。」
教務科に来た私は、早速話を切り出した。
そしてこのまま説教コースかなと思っていたのだが
「はい、どうぞこれを使って下さい。」
「・・・」

5秒で差し出された。
「良くいるんですよ。防弾制服を着て来ない子。今年は貴方だけのようですが、毎年三人くらい来ますね～。」
それは知らなかった。
まず調べてなかった気がする。
「ありがとうございます」
それはそれなんだが、周りの教師の視線が痛い。
「失礼しました。」
そう言って、鉛のような扉を閉じる。
あー、さっさと試験会場に行こう。

スケボーをロッカーに押し込み、制服を上に着た私は走って試験会場に向かう。すぐそこだし。早く行けば教室で寝れるかもしん無いし。
そんな期待を抱いた私が教室に入ったら予想どおり誰もいなかった。
「まぁ、誰もいないよね。」
7時過ぎ、一番窓側の一番後ろの椅子に座った私は
「・・・寝よ。」

アラームを８時５０分にセットして、意識を落とした。

・・どうして

・・どうして

・・パパにはもう会えないの？

前　　真っ暗

後　　な明かりはどうして

左　　パパばかり

右　　追いかけるの？

真

っ

暗

で

、

手術台に俯せに載せられて

ピリリリリリリリリッ

そこで夢が覚めた。

すぅっと切れ長の目を開ける。

教室は半分くらい埋まっている。

「トイレいこ、」

ガタン、と椅子から立ってゆっくりとした足取りで教室を出る。

実際あまりトイレに行きたいわけじゃ無い。

ただ気分が悪いから少し散歩しようとしただけだ。

「お父さん・・」

三ツ辻の角で俯いてあの人の名前を呼ぶ。

そんな感傷に浸っていたせいか、ドタドタという。足音に気づかなかった。

「すいませ、キャッ」

走った来た人が私にぶつかった。

相当のドジだぞ？

不意打ちを食らった私はバランスを崩した私はいつの間にか前にいた男の人を押し倒すかたちで転倒する。

流石に男の人も反応できなかったらしく、倒れた私の下敷きになっている。
私はつい癖で耳元に
「ありがとうございます」
と言う。それと共に男の人の心臓が、ドクン、と強く鳴る。
そして
「レディを守るのは、男の役目だからね。
君に怪我がなくて良かったよ。」
何て歯の浮くセリフを言いやがった。
そう言って、立ち上がった私に自己紹介する。
「俺は遠山　金次、そこにいる星伽　白雪の幼馴染だ。」
と私の後ろでオロオロしている女の子を指差して言った。
「え、嘘。ホントにキンちゃんなの？」
どうやら知り合いのようだ。
「あぁ、久しぶりだね。白雪。」
「ーーーキンちゃんっ‼？」
・・・だからって私を空気にするのはどうかと思う。私を挟んで桃色空間を作るのもどうかと思う。とち狂いそう。

そんな私を察したのか。遠山さんが白雪さんに私の事を言うと白雪さんが頭を下げた。
「さっきはぶつかってすいませんでした。」
「いいよいいよ。急いでたんでしょ?その巫女服を見るにＳＳＲだよね。試験会場はこじゃない筈だけど?」
ＳＳＲ、超能力捜査研究科とも呼ばれている学科。そこに行く人は防弾制服の必要が無い。
それとプラスαで特徴的な服の人が多い。
「はい、ありがとうございます。そうですけど場所を間違えてしまって、」
そうだったのか。
「解りました。次は気をつけてくださいね。」
そう言って、笑顔を向ける。すると白雪さんは大輪の花のような笑顔を浮かべて、
「はい!」
といった。
次いでに
「あの、お名前は?」
何て名前を聞いてきた。

「沙灘　E　澪です。沙羅双樹の沙、播磨灘の灘、アルファベットのE、シにゼロで澪です。私の事は澪と呼んで下さい。よろしく白雪さん、遠山さん。」
「はい、よろしくお願いします澪さん。それと私の事は白雪と呼び捨てして下さい。」
「あぁよろしく澪。ここであったのも何かの縁だ。もっと砕けた話し方で良いぞ?あと俺のこともキンジでいい。」
　って言って2人揃って手を前に出した。
「あぁよろしく。」
　・・・恐らくだが今まで読んだお父さんの本から推察するにこれが『長い付き合いになりそうだ。』
　ってやつかもしんない。
　私は2人の差し出された手を握りながら、そんな事を考えていた。
「じゃあ、またね。白雪」
　といってキンジと一緒に、試験会場の違うであろう白雪に手を振る。
　白雪が見えなくなった所で、キンジが話しかけて来た。
「さぁ、行こうか。遅れてはいけない。」
　こいつキザだ。
　だがまぁ、遅れて失格何て笑えないので2人揃って教室に向かう。

「OK、キンジ行こう。」
そう言って私はキンジの手をとって早歩きし始める。
キンジは私が手を握ったのがビックリしたのか驚いたのか少し戸惑っていたが柔和な笑顔を浮かべて
「あぁ」
と私に引かれるままにした。

教室に入って横に並んで座ると直ぐに教師が来た。
ガララッっていう大いに鼓膜を刺激する音がしたと思うと、髪の長いポニテを揺らして背の高い女性が教卓まで歩いて行ってきた。
重そーっな斬馬刀を担いで。
そして教壇に立った威圧感マックスな女性はさも面白そうに口を開いた。
内容は簡単に言うと女性の名前が蘭豹（らんぴょう）であり、試験方法は情報通りにバトルロワイヤルの何でもあり、体育館が使えない理由と分け方はくじ、ということだった。

そして今、キンジと一緒にくじを引いている。
「俺は一班だった。澪は？」
横にいるキンジが話し掛けたきた。
私も少しワクワクしながら、紙を開く。
そこには
「私も一班だった。」
1と書かれていた。
「キンジ、勝負よ？手なんて抜かないから。」
するとキンジはいかにも当然って風に
「あぁ、せっかくのレディのお誘いだ。喜んでお受けするよ。」
通常運転だ。なんか安心した。
「よーしお前ら。行くぞ～」
って蘭豹の呼ぶ声が聞こえる。
私がキンジの方を見たら、キンジが
「行こうか。澪？」
って笑いかけてくる。ああ、キンジってキザなんだな。って思いながらも嬉しがっている私がいる事に気付いた。

そっか、キンジってお父さんと大叔父様以外で初めて話した男の人だった。
「えぇ、もちろん。」
って言いながら笑顔を返してキンジと並んで歩き出した。キンジが顔を赤くしているのは気のせいだろう。
だからこそ話しかける。
「ねぇ、キンジ・・・・・・

実技棟へは直ぐだった。
そして15階ある建物の一階に一人ずつ配置される。私は一階だった。
唯一の武装であるナイフを確認する。うん、まぁ切れ味は落ちてはいないって位かな、最近使ってなかったし。手入れも毎日してるしね。
少し緊張してるかも、ね。
ブーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!?

試験が始まった。

第2話　the　examination　3／17
後編

『超能力（ステルス）』

先天的才能
７０から８０の種類があり、使用すると精神力を消耗する。これは高ランクの能力を使う程多く消耗する。
また、超能力を使う超能力者のランクにはG（グレード）と呼ばれる数字があり、この数字が大きいほど強い能力者ということになる。

つまり、超能力を使うには「才能」が必要である。絶対的に。

使えない者が羨望をを抱くには十分だった。

だが、ある男

一族は諦め無かった。

そして最後に　男は

男は実験台として娘を選んだ

た　の

だ　幸

せ

一族は最強を願って。

願

っ

て

。

目的の違いが軋轢を生む。

火種が導火線に飛び火するには簡単すぎた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一階　開始一分後

私は開始場所から動こうともしていなかった。

開始の合図が鳴った時、実技棟にいる人数は２０人いた。これはおかしい、受験している生徒は私を含めて１５人のはずである。そして、増えた人数分の５人が私と年齢が一致しない。つまり、ここから導き出される結論は、

「教師が混ざっている。」

ため息交じりの声で私は呟き、

「いるんでしょう?.気配を隠しているつもりかもしれないけど。」

私は教師のいる方向に話しかける。まぁ、私の声を聞いて違う階の人が来るかもしれない。と一瞬逡巡する。

そっちの方が好都合なんだけどね。

教師の方は反応無し。・・ビビっているわけでは無いはずなので挑発が足りないのかな?

私はポケットからおもむろにケータイを取り出して。

「へぇ、高梨　奈津矢は入学試験を受けに来たひよっこにびびっているチキンだってツ

イートしよ。」

と、言った瞬間私はサッと半身にする。

そのコンマ1秒後、私の携帯が有った所を弾丸が通り抜けていった。

「もう既に場所はばれてんだから出てきなよ。」

飛んできた方向に向かって、呆れたような声を出して声をかける。

そう実際の所、私には分かっていた。

試験前、配置に着いた時から。

「そうか、今ので位置を割り出したか。」

何か呟きながら男が現れる。

ジャッと足を踏み鳴らしてその男がこっちに歩いてくる。どうやらスニーキングを解いたらしい。

・・・いやまてよ、私は一歩も歩いてないんだから、あの人がしているわけないじゃん。大丈夫か？私。

そして男は、いや高梨奈津矢は私の5メートル程前で立ち止まる。一応警戒はしているらしい。

私は彼に最後の挑発をする。

「私にとっては、あなたがそこに居るって分かるのなんて朝飯前。はぁ、あなた程度では

私を欺けない。」

期待ハズレ

そんなことで姿を表すなんて私を下に見ている証拠。

そして、相手の力量を測る力が未熟だという事。

期待ハズレと結論付けた私は唯一の武装であるナイフをポケットから取り出す。そして、私が武装を取り出したのを見て相手は銃の照準を合わせる。

キレた高梨奈津矢は何も言わずに、パンッと私に向けて発砲する。

セミオートで発砲された一発の鉛玉は金属特有の光沢を放ちながらジャイロ回転して私の右肩に寸分違わずに撃ち抜こうとする。

私は右手にナイフを持っているので、被弾すれば私はナイフを手から離して丸腰になるだろう。

被弾すれば、ね。

しかし、私には銃弾がスローで見えていた。

私はナイフ振って、銃弾を切った。

「なッ・」

驚いた高梨奈津矢は動きを止める。
・・・そういう所がまだ彼が未熟だという最もたる証だ。
勝負がさっきので決まるなんて保証はどこにも無いのに。
呆れていながらも私はその驚いている刹那というとても短い時間の間に高梨奈津矢の横へ行く。
「期待ハズレ」
その言葉で私が横に来た事が分かったのか、私の方を振り向く。だかもう、遅い。
「バイバイ」
と言って微笑みながら、手刀で意識を刈り取る。
まだ終わりじゃ無い。
私は、高梨奈津矢の反対側の物陰に隠れて遠くから漁夫の利を頂こうとしていたであろう受験生の喉元にナイフを突き立てる。
「銃を渡して?」
バタン、高梨奈津矢が倒れた音がする。
まぁ、いっか。
「・・・」
だんまりか、時間かけたく無いのでさっさとしよう。

「分かったわ」
そう一言だけ残して私は彼の意識も刈り取る。
そうして意識を失った彼もまた、バタンッと倒れる。
終了。もう一階には誰もいない。

「終わったぁ。」
こんな程度、私にとっては準備体操にもならない。正直な感想は
「つまんない」
ここが日本で最高峰だからこそ来たのに、今のままでは来た意味が無い。
私は天井を見つめて、13階で交戦しているであろう彼の事を視て呟く。
「期待していいんだよね。キンジ」
有象無象なんてどうでもいい、今はただただ彼に会いたかった。会って死闘(戦い)ししたい。
試験が始まる前にした2人の約束を思い出す。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊♪＊＊＊＊

「ねぇキンジ、賭けをしない？」
私はいい笑顔でキンジに話し掛ける。
「どうしたんだ急に、賭けなら構わないが君は何を賭けようとしてるんだ？」
横にいるキンジがこっちを向いて肯定の意を返してくる。
ついでに何を賭けるか聞かれたので適当に返す。
だって私が勝つし。
「そうだなぁ、手料理ご馳走しようか？」
因みにだが私はこの時何も考えてなかった。
「女性の手料理はならますますやる気が出るな。なら俺は負けたら一つ何でも言うことを聞いてあげよう。」
・・・来たかもこれ。あのアパート今月滞納してるから明日追い出される所なんだけどこれでキンジの家に転がり込める。
「その条件。乗った！」
この時私は嬉しさのあまりにガッツポーズをしてしまい、蘭豹の厳つい目に睨まれました
まーる
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「次は、初め5階だった人か。」
3階と4階だった人がリタイアして5階の人が降りてきているのを確認して歩き出す。
階段についた私はコツコツと音を立てて登っていく。挑発として。
1分経過

2分経過

「真面目だなぁ、」
3階と4階の間階段に差し掛かった時、私は呟く。私は尾行されている。尾行してる彼女、3分経ったのに全く仕掛けてこない。このまま尾行させてあげるのもいいけど女の子だし、話し掛けようかな。
痺れを切らしてしまった私は、自分から彼女に会うことにする。
「特別サービス。自分と相手の力量を測る事が出来た貴女には、私から向かってあげまーす。」
そう言って、私は尾行していた女の子の背後をとる。

「え？」
尾けていた私が急に背後に現れたのでその子は、腰を抜かしてしまったみたいだ。座り込んでしまっている。咄嗟にホルスターの銃を脱こうとしているが無いのか、動揺して制服を弄っている。
「これ探してるの？」
と言って彼女の銃を2つとも彼女に向ける。
「降伏しなさい」
笑顔で宣告する。
「・・・はい」
素直でいいね。こういう娘、結構好き。
嬉しくなった私は彼女の耳元に顔を近づけて囁く。
「本気出さないとね、峰理子ちゃん♪」
同時に意識も刈り取った。

意識の無い峰理子ちゃんの体を比較的綺麗な所に寝かせてまた歩き出す。今は音を立てないスニーキングで。
スニーキングするには訳がある。

なぜなら次の私の標的は教師の蘭豹だからだ。
『象殺し』とは正面からかち合いたくない。単純に面倒だからだ。蘭豹の居るのは7階なので、ゆっくりと時間を掛けて階段上がる。
5階誰も無し
6階誰も無し
気配を消して7階に来た私は隠れている蘭豹の後ろに行く。
正直、本気でスニーキングした私に気づける人なんて殆ど居ない。
だって、実際に蘭豹も私にナイフを首筋に当てられるまで気づかなかったし。

「⊠おまえ、どうやッ・・・」
私は彼女の意識を刈り取る。なんか面倒そだったし。
その時、階段からゆっくり歩いて降りてくる音が聞こえた。
そして今、生き残っているのはふたりしかいない

「待ってたよキンジ。約束、覚えてるよね?」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ドイツの雪山の中にその一族はいた。

その一族の悲願は超能力を使える人間を人為的に創り出すことだった。

また、日本にある男がいた。

彼はあるマイクロナノチップを造った。それを脳に埋め込めば超能力が使えるようになるという夢の様なナノチップを。

ただ、問題があるとするならば『人間に埋め込むとその人はコンマ1秒で廃人となる。』事だろう。

もしかしたら、彼らが出会うのは

『運命』

だったのかもしれない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「待ってたよキンジ。約束、覚えてるよね？」

後ろで階段を降りて来たばかりのキンジに声をかける。
「ああこのビルで生き残っているのは俺達しかいない。」
その返事を聞いた私はポケットのコインを弾く。
私の親指に弾かれたコインは放物線を描いて床に落ちるて音を立てる。

キンッと。
そんな金属音に被せるように私達は走り出す。
ダンッと床をけり、私達は互いの得物を構え、お互いに同じタイミングで得物であるナイフを突き出す。
カンッ、と火花が散る。
私達は2人とも全体重を掛けていたが、脂肪も筋肉も少なく、体重も軽い私が少し押し負けてしまう。そしてキンジは容赦無く腰にあるベレッタを抜いて3発、右肩と腹とナイフそのものに狙いを澄まして早撃してくる。
セミオートですよね？
それを見た私は右側に倒れ込んで一回転して立ち上がる。
「今のを躱されたのは初めてだ。凄いねこれは本気を出すべきだな。」
そう言ってキンジはベレッタとナイフを腰に直して丸腰になる。そして爆弾まで投

下する。
「おいで？本気で相手しよう。」
　私は米神のあたりで、ブチッ、と言う音を聞いた。
　実際なってるだろう。なめられてると思った私はナイフで思いっきり突っ込む。後から考えてみれば、迂闊だった。
「あぁ」
　そう言って私はナイフのネクタイを狙う。ネクタイは防刃繊維なので傷つくことは無いからだ。
　これが決まれば終わるだろう。
　しかしながら、終わらなかった。
「はっ、」
　私のナイフはその掛け声とともに蹴り飛ばされてしまう。
　私には見えていた。キンジが音速で
　ナイフを蹴飛ばすのを。
「ッッ！」
　丸腰になった私は距離を取るために床を思いっきり蹴って後退する。
　私はコンマ１秒後になって、この判断に後悔する。

何故ならキンジがまたベレッタで早撃ちしてきたからだ。

「！」

驚いた私はつい、超能力の一つを使ってしまった、超能力と言うには適切では無いがこの際置いておくとしよう。

私は飛んで来た一発の銃弾を手の平で握った。

普通なら銃弾が手にめり込んでしまうだろう。

しかし、私は超能力で手の平の周りの空気にを固定化してプレートのようにする能力を使ったので、銃弾私には当たっていない。

今度はキンジが驚愕を顔一面に浮かべていた。

私は後退しながらバク転をしてキンジのベレッタを蹴り飛ばす。隙を突いたのでカンタンにベレッタはキンジの手から飛んでいく。

普通の人ならば、飛んで行ったベレッタに気をとられてしまうだろう。

キンジは違った。

ベレッタを目で全く追わず勝機とばかりに私の方へ真っ直ぐに床を蹴り、体勢が整った私の腹に向かって掌底打ちを伸ばしてくる。

負けじと私も掌底打ちを叩き落そうと手刀を放つ。

私の手刀はキンジ掌底打ちにあたり、撃ち落とすがキンジは2段構えだった。

亜音速で私の腹を蹴りに来ていた。
「かはっ、ッッ！」
胸中の空気が全て吐き出される。こんな蹴りは初めてだった。空気のプレートを腹だけに作ったお陰で蹴りと言う点攻撃を腹全体に面攻撃させる羽目になった。お陰で威力は分散したが。
攻撃を受けた私はその反動を使ってキンジから距離を取る。
「やるね」
距離を取った私は息を切らしながらキンジに賞賛の言葉をかける。
「光栄だ。そしてすまないが時間のようだ。」

ブーーーーーーーーーーッ、
終わった。
試験後で武装解除した私達は互いに手を取る。
要するに握手を交わした。
「引き分けだね、キンジ。」
「ああ、そうだな。ミオ。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

３月１７日　正午

私はキンジと昼食を取っていた。

引き分けた私達は互いに賭けに勝ったことにした。つまり私はキンジに手料理をご馳走するという事だ。

そして私達の眼の前にはわたしの作った鮭の塩焼きと味噌汁、ご飯がある。

一口食べたキンジはわたしの目を真っ直ぐ見て言った。

「普通だな」

フォークがキンジの後ろの壁に刺さったのはご愛嬌。

「・・・で俺は何でも言う事を聞くと言った。何をして欲しいんだ？」

漸く真面目になったキンジが再度、わたしの目を見て質問を投げかける。

わたしの答えは一つしか無い。

「キンジんちに居候させて？」

EX side キンジ

チュンチュン、チュンチュン

雀の喉を通る音が俺の鼓膜を刺激する。

今はいったい何時なのだろうか、何時もならば雀が鳴いたくらいで夢にヒビが入ることなどあり得ない。・・・眠りが浅かったのだろうか?それとも体に異常が生じたとかか?

そこまで考えたところで俺は左腕の感覚がないことに気がつく。

「何で左腕が痺れてるｎ・・ほえ?」

疑問を口にしながら横を向いた俺は、余りにもあり得ないことに直面して狼狽し顔をそらしてしまう。

そして左手の感覚が無いのがとっても悔しい。

自分が見た光景が余りにも信じられないのでつい、右手の親指と人差し指でほっぺたをつねる、ほっぺたをつねる。

痛い。　これは現実だ。

その時になってようやく俺は昨日の出来事のすべてを思い出す。そうだ、そうだっ

た。

高揚していたんだ。彼女との闘いに。

この左手を枕にして寝ている少女との戦いに。

あぁ、そうか、だから起きたのか。ヒステリアモードに成っているから聴力が強化され、雀の鳴き声を捉え朝だと体が判断したのだろう。厄介だな。せっかくの休日だから昼まで寝ようとしていた俺の計画が台無しになってしまった。ヒステリアモード恐るべし。

ヒスってる俺はそっと彼女を左腕から降ろして布団から抜け出す。一切の音を立てずにしたおかげか俺の布団を今占拠している少女―澪は起きなかった。スヤスヤといった感じで寝ている。

「俺は昨日、こいつと引き分けたんだよなぁ。」そう言って俺、遠山キンジは昨日の闘った時を思い出す。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

放物線を描いたコインが床に落ち、特有の金属音がなる。

その音が鼓膜を震わせる前に俺とミオは互いに走り出していた。

互いにナイフを手にした俺たちの狙いは敵の武装を解除すること。つまりは相手のナイフをいかにして無力化すること。

俺のナイフとミオのナイフが接触して火花を散らす。互いにナイフを狙っているため当然の帰結だ。

素人ならこの一撃で痺れた手からナイフを落とす者もいるだろう。だが、ミオは落とさなかった。まあ、ナイフを合わせることができる時点で素人では無いことに気が付いてはいたが。

拮抗するかに思える一瞬の小競り合いも俺が押し切る。

単純な話だ。体重も俺の方が多い、それで無くとも今の俺はヒステリアモードなので身体能力が向上している。

押し負けたミオは若干顔を歪ませて後退する。押し返されたとも言え無くも無い。そして俺はその隙を見逃すことなどしなかった。

腰にあるベレッタを引き抜いて右肩、土手っ腹、ナイフの3つを狙って早撃する。

正直なところ勝負はいつも通りにこれで決まったかと思ったが、ミオは唸りを上げる弾丸を見てから俺から見て右側、ミオにとって左側に身を投げて一回転して弾丸を躱す。

普通ならここでさらに追撃を掛けるべきだったのだろう。しかし、初めてこの状況に

置いて躱された俺は呆気に取られていた。
ミオが立ち上がるの見て俺は迷っていた選択肢を一つに絞る。
それはただ、「本気を出さないと負ける」っていう本能が察したものとただ単に「負けたく無い」という思いだった。
キンジは遠山の体術を使うことにした。つまりは
「おいで？本気で相手をしよう。」
本気(マジ)だ。
「ああ」
それを恐らくは挑発として捉えたであろうミオが単純な攻撃を放って来る。
血がのぼっているのだろうでなければミオがこんな攻撃をするはずが無い・・・と思う。
頭に血がのぼっていたにも関わらず丁寧に防刃ネクタイを狙ってくる。しかし、そのナイフの使い方に違和感を覚える。
まあいいか、そう思った俺は胸に迫るナイフを音速で蹴飛ばした。
蹴飛ばされると思っていなかったであろうミオは、真っ直ぐ後ろへと無理な姿勢で離脱しようとする。
俺は確かめたくて一発の銃弾をミオのあまり無い胸に早撃ちする。

俺は単純にミオがどうするか見たかった。俺は防弾制服の肘で叩き落とすだろうと予想していた。

ベレッタの銃口から出た銃弾は真っ直ぐミオの元へと向かい、

ミオの掌の中に収まった。

そのときの俺の顔はさぞかし芸人だっただろう。見開いた目から流れてくる情報の信憑性を疑った。

その思考の空白はミオに愛銃のベレッタを蹴り飛ばされたことで色が戻る。

そして、この状況をチャンスと脳が捉えた。

誰しも、蹴りや手刀などの技を使った直後は絶対に隙ができる。

俺は愛銃を囮にして（そうなった）作った隙にミオの懐に飛び込み、掌底を繰り出す。

銃弾を見てから避けれるミオだ。冷静に手刀で叩き落された。だが、

掌底は本命では無い。

掌底の時の腰の回転をそのまま乗せた右脚がミオの腹に迫っていた。

掌底に隠れて見にくかったのだろう。掌底を叩き落としてから迫る右脚を視認してもミオは回避できなかった。

ガンッ・・・いいっっっったい。人の腹を蹴った感じじゃなかった。まるで鉄を蹴っ

たみたいだ。

俺が予想外の痛みに疑問を抱えている間にミオは俺から距離を取っていた。正直まだミオとこうしていたい。が

「やるね」

「光栄だ。そしてすまないが時間のようだ。」

ブーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ

握手をした。

再戦しよう。という意味も込めて、

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そのあとはミオが家に転がり込んできた。というか居座ってきた。

本人曰く「滞納したら大家さんに追い出された～、」らしい。

いつの間にか俺の祖父母と仲良くなっているし、どうしてあれ程話が合うのやら、俺にはさっぱりな話ばかりだ。

俺の兄の遠山金一は今日は帰ってこない。出張しているために。

そうして俺はミオと違う部屋で寝た筈だったんだが、

今ミオが俺の布団にいる。

「・・・成るように成るだろ」

部屋を出るためミオに背を向けた。

ヒステリアモードの俺には分かってしまった。

俺が背を向けた途端に顔を苦しそうに歪めた事に。

俺は部屋の扉をそっと閉めた。
待とう、澪が話してくれるまで
早朝の朝日が俺にかげを落とした。今はただ弱い自分が嫌だった。
理想の遠さを噛み締めた朝。

第3話　ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ　３／１９

降り積もる雪の中、真っ白い水の中
私たちは水に浮かんでいる。
朧な月を羨んで

イタイ
鋭い鈍痛が頭部を襲う。
イタイ
昔、私が小さい時から
ズズッーーーーーーズズッ、
イタイ。あの日からずっと。
お父さんは六ツ裂き
試験管なら良かったのに
プールのような所で唯
唯、窓の外の月に嫉妬している。

アナタハダアレ？

ワタシは

だあれ

？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ミオ、もう9時だぞ。起きろ。おいミオ。」

とってもハスキーに聞こえる声で意識が浮上してくる。

あぁよかった、ワタシは私だ。

それを脳が確認すると同時に耳が正常になる。私を呼ぶ声はだんだんとだんだんと低くなり、その人本来の声になる。私はそのイントネーションと合成波の種類を計測。

該当者は、遠山キンジ　同い年

「おはよーっ、キンジ！」

そうだ。起こしてくれたキンジに御礼代わりにハグしよう。って考えた私は音源からして私を起こす為に膝立ちになっているであろうキンジの首に向けて跳ねるように上体を起こしながら絡まりついて離さないようにする。後は重力に任せればキンジを布団に引き込める筈、だった。

「！」

キンジは思っていたよりも力が強かった。

宙ぶらりんになった私の背中に手を回して、受け止めた。
私は少し意外だったのだが、初めからそうなることをわかってるように演技して笑顔でキンジに感謝の言葉をかける。
いやぁホント受け止められるなんて思わなかったな。
「わざわざ客間にまで起こしに来てくれてありがとう」
御礼することは意外と大事だ。
勝ち誇ったかのように胸を張っている所、薄眼を開けてキンジの表情を盗み見る。するとキンジの顔には少しの驚愕とヒクついた唇が貼り付けられていた。…え、どうして？普通なら頬でも赤くする場面じゃ無いのかな？少なくともお父さんが遺していった『ラノベ』のヒロインたちは主人公を見ただけでも赤くなっているのに。
寝起きの私は街を歩いている主人公よりも魅力が無いのだろうか？
私が変な思考に走っていると、キンジが唇をひくつかせながら質問してくる。
「ここがどこだかわかるか？ミオ？」
「ええ、わかるわよ。客間でし……」
キンジに言われて周りを見渡してみると、中学の教科書の積まれた勉強机に筆笥など必要最低限の家具……

あ、これらの私物（主に教科書）から推測するにここは恐らくキンジの部屋だ。
そこまで見てから私は目線を下にして、自分の格好を確かめる。
すると下着しかしてない自分。恐らく寝ている時に脱いだのだろう。実際、勉強机の近くに私の寝間着がある。
キンジの部屋＋下着の私＋ヒクついたキンジ
この式から導き出される解は一つしか無い。
「会ったその日になんて、キンジって肉食？草食にしか見えないのに⊠」
「違うわっ‼？」
…否定された。まぁそうだと思ってた。だってその次の朝には男の人はコーヒー淹れて起こしに来るらしいしね。
そんな的はずれな思考する私を遮るように、キンジの質問が私に来る。
「昨日の夜には何もなかった。それと単刀直入に聞くが朝から魘されてるのは悪夢か？」
「！」
ギョッ、とした私はキンジの目を写真のように見つめる。それはもう穴が開くくらいに。キンジは私の視線に耐えきれなくなったのかそっぽを向く。キンジの可愛いとこ見つけたかも、

「その、なんだ、心配になっただけだ。他意は無い。」
なんて私を気遣った発言までバツが悪そうにして言ってくる。正直、これは出会って1日しか経ってない奴にできる態度では無い。
その、あの、なんだ。あれだ。あれ。
「ありがとう」
困ったらこの一言に限る。
でも気遣ってくれるキンジの姿勢はとても嬉しかった。まあ、私の事には気付いてないみたいだし。
他意上がったキンジは扉を閉めながら。ご飯の所在を伝える。まあ、私は『知って』たけどね。
「あぁ、下にご飯出来てるから、服着て下に来いよ。」
「うん、わかった。」
因みにこの後ネグリジェを着て行ってキンジに顔にお茶吹きかけられたのは余り良い記憶では無い。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ぴんポーン

チャイムが鳴った音を聞いた私は一旦食事の手を止める。
「キンジ～、チャイムが鳴ったよ?」
そして食事を既に済ませて本を読んでいるキンジにに一応の声をかける。キンジは私の声を聞いて、読んでいる本に栞を挟んで立ち上がる。
「俺が出よう、ミオは食事中だからな」
そういってキンジは読書の手を止め、立ち上がって玄関に行こうとする。
「いや、私が行く!」
しかし、直感的に出たくなった私は残りの食事を掻き込み、玄関の方にタッタッタッって足取りで行く。キンジが後ろの方で「その格好は……」って言ってる気がするが無視して玄関へ。お父さんの遺書に『新聞配達なら断れ』って書いてあったし対応に関しては多分大丈夫だろう。(←謎の自信)
そうして扉の前に立った私は遺書にあった文句を並べる。
「どちらさまでしょうか?」

開けると白雪がいた。
開け放った扉の前には昨日出会って友達になった白雪がいた。私はことばを出さず呆然と立っている白雪にまた会えたことが嬉しくて、声をかけた。
「昨日ぶりだね～白雪！」
しかし、白雪には反応が無い。どうしたのかな？、と私が戸惑っていると1秒ほどして白雪の拘束が解けた。……はずなんだけど、固まった次は口が小刻みに震えだしている。
私がキンジを呼ぼうかなと思考がまとまり出した時、白雪の今日の第一声（私にとって）がキンジの家に響いた。
「この、この、泥棒猫ーーーーーーーー‼？」
と言って腰にあった刀を鞘から抜いて私に大上段で斬りかかってきた。
これに私はさも当然のの如くに白雪の持っていた刀を額で受け止めた。
避けようともしなかった私に対して目を閉じていた白雪は確認できず刀を止められなかったのだ。

カツンッという予想外の音を聞いた白雪が目を開けると蒼ざめた顔で刀を戻す。
そして傷一つ無い私を見て驚きの目と疑問を投げかける。
「貴方、いやミオさんは超偵なんですね。」
「超能力は使えるね。後で説明するのも面倒だから見せたの。」
これなら嘘は言っていない。まぁ、意図的に白雪に見せたものだし。
「そんな事よりもなんでキンちゃんの家にいるの?」
そんな事ってどういう事?白雪が言い出したんだよね?
「うん、居候してるんだ。実は住んでたアパートの大家さんに追い出されちゃって。路頭に迷う筈だった私はキンジによって保護されたってわけ。」
そこまで言ったところで後ろから微力の怒気を含んだキンジの声が掛かる。恐らく私がすぐに帰ってこないから来たんだろう。
「賭けをしてまで来たよな?ミオ?あぁそれと白雪、昨日ぶりだけどどうしたんだ?」
まぁそこで白雪に気づいたキンジが私に返答させない間隔で問いを放つ。
「うん、私は今日の午後で帰っちゃうからキンちゃんにお別れの挨拶をしようと思って来たの」
「そうか?じゃあ立ち話も何だし上って行けよ。」
私が（脳内で）ふざけている間に話は進んでいっちゃう。おーい私も入れてよー。

「そうだね。ここだと私が寒いし」
「お前は服を着ろ」
…まぁネグリジェで玄関先はきついんだよ。寒くて。しかも白雪も苦笑いだしね、
そうして私は玄関に２人を残して居間へと行く。
「でも上がっていいのキンちゃん？」
「あぁそっちの方が話しやすいだろ？ここだと寒いし」
２人の話し声がまだ続いてる。
「おーい、まだー？」
先に居間へと着いた私は首だけ扉から出して２人に声を掛けた。
するとキンジが返事を返してくる。
「もう直ぐだから飯の残り食っておけ。さ、白雪も上がれって。」
「う、うん」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

居間で向かい合って座った私達、開口一番は白雪だった。
「久し振りだね、キンちゃん。」
「あぁ」

「…」
「…」
　…が、続かない。
　多分ここは私の出番だろう。
「ねぇ、２人はいつぐらいから知り合い？」
　キンジがその質問に答えた。
「白雪とは割と小さい頃に出会ったな。長期休暇の時親父に連れられていった山の神社にいたんだ。」
　…うん私は『知ってる』。しかしまぁ、私の中身は見せびらかせる気はないので言わないけど。
「巫女服着ているのは、事実その神社の巫女だからだ。白雪の姉妹全員が巫女服着ている。」
「へぇ、そうなんだ。？て事は白雪は姉妹がいるの？」
「そうだな、たくさんいるぞ、…」
　答えたキンジの口調はどこかぎこちない。目を合わせないとかキンジは態度に表れやすいのでそのことに気づかない私じゃない。特殊な環境だったのだろうか？
「白雪、昔キンジに何かしてもらったの？」

なので私は白雪にターゲットロックする。どうしてそんなにキンジのことが好きになったのか聞くために。

別に本人に聞いたわけじゃないし、キンジにそんな甲斐性を求めることなど無駄だと『知って』いるのと同様に、白雪がキンジのこと好きだと『知って』いるからだ。

「・・キンちゃんはね、私を外に、花火大会に連れて行ってくれたんだ。帰ってとっても怒られちゃったけど、境内でしたどんな遊びよりも楽しかった。今でも刻銘に覚えているよ。私が過ごした中で一番鮮明に脳裏へと焼き付いた空だから・・・」

うっとりとした、何かその日日が今の自分と距離があるかのように斜め四十五度を向いて、私たちから目をそらして言う。

その姿に、あきらめてしまった瞳に、私は耐えられなかった。聞いてられなかった。

まるで今を大切にしようともしないような姿に。

私には『今』以上に大切なものなんて無いから。

すうっと、目を細めた私は机越しに体を乗り出し、白雪の両頬を両手で挟んで目と目を合わせる。驚いてなすがままな白雪に私はあさっての怒りをぶつける。

「今の私たちは?どうし簡単にあきらめれるの?」

「え、」
　驚いた白雪はとっさの言葉が出ないようで私から目をそらして私の両手の中でおろおろしている。
「私諦めてなんては……」
「いや、諦めてる。」
　否定しようとした白雪の言葉に被せて彼女の言葉を否定する。その言葉は聞きたく無い。
　たとえ自分の我儘の言葉だったとしても、これは言える。『そんな白雪は見たくない』
　だから私は白雪の耳元で囁く。
「変われない人間なんて居ない。それはただ変わろうとしないだけ」
　そう言いながら白雪の体を優しく抱きしめる。すると私の胸に白雪のｎｉｃｅ　ｂｏｄｙが押し付けられるわけで、あっヤバイ。鼻血が・・なかなかいい体だな。と余分な脂肪の無い私は若干敗北感を感じなくも無い。
　白雪は泣かなかった。でも震える体が何よりも彼女の心境を表しているのでは無いだろうか？